

Voice of SESSION HOUSE 2023

2024年3月23日発行

巻頭言

セッションハウスが創設されたのは1991年だが、コロナ禍の騒ぎの中で記念事業も出来ないままで30周年を過ぎてしまった。しかし、コロナ禍で観客数を限定する一方で公演の様態をオンラインで配信するなどの工夫をこらして公演活動を実施してきた。2023年、コロナ禍の嵐が下火になるにつれて舞台でのダンスを見る観客数も戻り始め、数多くの公演が実施された。公募公演の「シアター 21 フェス」は「U25」や「U35」という年齢制限によるものを含めて130回を越えるに至った。その中からもう一度見たいという作品を集めた「ダンス花」も春に行われ、久しく途絶えていた海外からの招待として韓国から2名のダンサーを招くことが出来たのは、嬉しいことだった。また女性振付家4名による公演「アカイクツ」も春と秋に2回おこなわれたし、ダンサーの単独自主公演を支援する「D-zone」フェスティバルも数多く行われた。大学生による「UDC」も例年のようにバトンタッチして実施された。



さらに毎年実施してきた近藤良平主宰の「リンゴ企画」も2月に行われ、音楽家、落語家、サーカス、新体操、書道家が参加して賑やかに行われた。



ところで2023年は、セッションハウスの劇場直属のカンパニーのマドモアゼル・シネマが30周年を迎え、慶應大学大学院メディア・デザイン学科と共同して、ダンサーと観客の生体反応を試みる実験的な公演「Boiling Mind」を実施すると共に、2023年9月から2024年3月にかけて「ダンスブリッジ・明日に架ける橋」と題して、マドに加えてさまざまなジャンルのアーティストと共演する公演を継続実施している。その中には地元神楽坂との関係を生かして女義太夫と共演する企画も敢行された。

以上の公演活動にさまざまな形で関わってくれた人たちの声を聞いていただきたいと願っている。(記：伊藤孝)

Voice of Ito Naoko

1993年セッションハウスの劇場専属のマドモアゼル・シネマの主宰者・振付家を続けてきた伊藤直子が、この30年に込めた想いを語ります。

「マドモアゼル・シネマの30年」

伊藤直子

過ぎてみればあつと言う間。渦中にあるときはその時々必死な30年です。1993年、志を持つ女子たちが集まって立ち上げた「マドモアゼル・シネマ」という活動が、30年後も受け継がれているとは誰も想像もしていませんでした。その時々「踊りたい！」と集まった情熱が受け継がれての今日です。立ち上げた現場に現在もいるのは振付の私一人になりました。女性の人生を物語る流れです。30年たってやはりまだ女性は自分の意思だけでは継続が困難な立場にあるなあとしみじみと思います。一人では生きられない人生ですから、当然ながらたくさんの人と関り助けられ、それぞれの活動のあり方はそのままその人の人生です。続けてきた人はその努力が蓄積されて、いいダンサーになったなど誇りに思いますし、舞台に立つことはかなわなくなっても、マド時代を大切に思ってくれるダンサーたちの思いに励まされます。カンパニー活動は同志であり、家族を超える分かち合いもあります。作品をどうしたら作れるのか分からず、ひたすらピナの「どう踊るかではなく、なぜ踊るか」に対峙してきた初期。どうやっても「マドはマド」と言われるところから抜け出さず焦ったころ。目指してもいないのにまるで宮沢賢治の「雨にも負けず」になってしまう哀しさ。ホメラレモセズ クニモサレズ、それでもせつせと作品に向き合い、何回も作り直す間に見えてくるものがありました。言葉にするとダサいのですが、人の命やその人のからだは誰でもないその人として輝いて見えてきます。ひとり一人かけがえのないたった一つの命だと、当たり前なのがダンスを通して知ることによって光として感じる不思議に出会いました。今も日々クリエイションに、今いるダンサー達と取り組みます。日常のからだしか持っていなかった若いダンサーが、非日常の身体で動き出すときの面白さや、感じる喜び。ピナが言った「なぜ踊るか」と向き合ったダンサーが舞台上で生き始めると、ミンナニデクノポートヨバレテモ ソウイウモノニワタシハナリタイ！とダンスをする喜びでいっぱいになります。もう踊らない私は、人のからだを借りて体感します。観客1号がマドモアゼル・シネマの振付の立ち位置、創るときには目に見えない「観客」という存在が創作の原点にあります。小劇場として活動できる最低の設備を備え、ダンスのための小劇場、ダンスの場を作ろうと1991年セッションハウスを設立した私たちと、レジデンスカンパニーを作ろうと立ち上がった女性達が協働した結果が今を作っています。現実はずっと厳しく、反比例するように踊るからだに感動し、苦しみも忘れて過ごした30年。ダンスにはそんな力がありまして、照明も音響も美術も衣裳も制作も舞台を作るスタッフ皆が励まされ支え合ってやってきたように感じます。



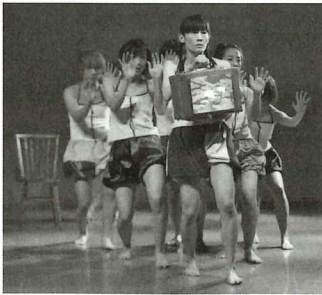
Voice of Takenoshita Tamami

マドモアゼル・シネマの30年間大勢のダンサーが参加してきましたが、最も長く在団している竹之下たまみが、その想いを寄せてくれました。

私とマドモアゼル・シネマ-30周年に寄せて

竹之下たまみ

20数年前、舞踊の大学・大学院に進んだ方がいいが、卒業後も踊れる環境を作るにはどうすればよいかと右往左往していた頃、大学の先輩である勝部知子さんが踊っていたマドモアゼル・シネマを見た。マドの作品初見の感想は、いろんなタイプなダンサーがいるなあ、使っている曲が好きだなあ、という単純なものしかなかったが、まずは定期的に体を作る場所を求めて直子さんのクラスに参加してみた。ダンスのみで生活することの難しさを感じていたが、仕事をしながらでもダンスを続けている直子クラス、マドダンサーの姿を見て、大変だけれどもそのように生活している人があるならば、私もできるかも、と卒業後の方向性を定めた。そして社会人1年目の夏に初めてマドモアゼル・シネマの公演に誘われ参加した。それがマド10周年の公演だった。マドのダンサーは仕事+ダンス+スタッフの3足の草鞋を履いて生活している。最初の頃は就職先の業務に慣れるのに必死で、両立の厳しさを感じていたが、慣れてくるとその生活が日常になっていった。幸いなことに環境と体力に恵まれてこれまで続けることができた。女性の生き方はダンスだけではなくどのような仕事においてもライフステージに左右される。マドもそのような理由で続けることができなくなったダンサーも少なくない。違う現場を求めたり、自分のスタイルで踊りたい、という理由で退団したダンサーもいる。今まで縁あって携わってきたダンサーそれぞれの人生が少しずつクロスして皆で繋いで成長していった30年のように思う。私自身は、44歳で亡くなった野和田恵里花さんの年齢までは続けよう、という目標を密かに持って続けていた。その年齢も超え、あちこち怪我をしつつも持ちこたえ、気づけば今年、年女。永遠はない。が、レッスンの度、舞台の度に楽しさ悔しさも含めて新しい発見があると、もうちょっと頑張ってみようか、と奮い立たせる。2024年も新しいことに挑戦しているマド。三十路のマドモアゼル・シネマもよろしく願ひ致します。



Voice of Takahashi Branka

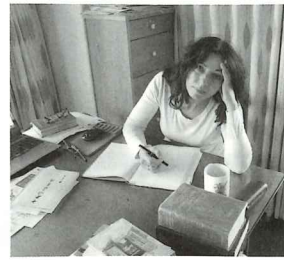
かつてマドモアゼル・シネマの作品「彼女の椅子」の台本を書き舞台にたったことのあるセルビア人の作家・写真家・俳優の高橋ブランカさん。現在ドイツのフランクフルトに滞在しているが、今も忘れられないマドについての想いを書いたエッセイを寄せてくれました。

マドの世界、世界のマド

高橋ブランカ

もう30年ですか？まだ30年ですか？「マドモアゼル・シネマ」の場合は両方とも言えます。若々しくて常に伸びようと(成長しよう?)しているマドを見ていると、本当は立派な《大人》であることは不思議に思えてきます。しかもこのワカーイ・若い53歳(笑)の

私の、ついこの間始まったように感じる結婚生活と同じ年数なので、もう30年?!と驚きが飛び出ていく。かと言って、遙か昔から、私たちの人生の背景に常にあるような存在にも感じるので、たった30年?!とも思えます。私はボスニア出身の歌手・画家のヤドランカに連れてもらってセッションハウスに初めて行った時に孝さんが名言をはきました——「ヤドランカ、ブランカ…何とかならんか?」1990年代でした。その時にマドモアゼル・シネマのことも聞きました。しかし日本語と日本での生活に慣れるのに手が一杯だったので、ダンスどころではありませんでした。それとは逆に夫の勤務でミュンヘンにいた時に、ヴッパータールでピーナ・パウシュのダンサーとコラボをしますから観に来ませんか、と孝さんに声をかけていただいた時に、もう一人の日本人友達と一緒に行きました。体も脳も硬い私はその時にインプロビゼーションに参加をさせてもらい、舞台上で踊る楽しみを少しかじりました。この思い出を《早送り》すると、2010年にセッションハウスのガーデンで独り芝居をした時にわずかながらでも踊っていました。ちょっとした振り付けを自分で考えて、直子さんの前で踊りましたよ！なんとぞんざいなこと！ヴッパータールに話を戻りますと、ドイツ在住の村雲敦子さんに会って、ほぼ20年後に二人でマドの作品「彼女の椅子」に出演することになりました。赤いタートルネックセータを着た(写真がある)当時の私は、会ったばかりの敦子さんとマドモアゼル・シネマのお嬢さん達と一緒に舞台上立つ、と夢にも思えませんでした。海外の生活を終え、日本に戻ったら今度は12年間東京にいました。マドの公演を恐らく全部観ました。作品に少しずつ言葉を取り入れるようになっていくマドは益々身近な存在になっていきました。表現の手段として言葉を使う私には、言葉とダンスの融合がこの上ないインパクトの強いものです。直子さんが「彼女の椅子」の大まかなアイデアを伝えてくださった時に、興奮して台詞を書きました。敦子さんの台詞と合わせたり、踊るお嬢さん達とも動きを合わせたりして、最高に楽しかったです。物書きの多くはチームワークが苦手、私もどちらかと言えばそういうタイプです。舞台上立っても、主に独り芝居です。「彼女の椅子」はどうなるのでしょうか、と最初は心配しましたが、柔らかいが確かな直子さんの指導、そして肉体的にも精神的にも完璧に調和のとれた踊り子たちの協力があったりリハーサルが終わればもう次回が待ち遠しかったです。「彼女の椅子」の公演自体は、記憶がたしかならば、3回でした。2回目は初回より、3回目は2回目より良くなっていきました。どんどんやりたかったです！東京の人皆に披露してから電車に乗って日本中で公演がしたかったです。日本人皆に見せてから飛行機に乗って今度は世界のあちこちで公演がしたかったです。それほどこの作品は皆に通じるものだと感じていますから。そして何と、望みどおりに私の故郷セルビアで公演が計画され始めました。しかしながら、基金など、または日本とヨーロッパのコロナへの対応の違いで話は流れてしまいました。残念でたまりません。「中止ではなく、延期として見なしましょう」と主催者に言われましたが、タイミングを逃してしまっような気がします。尤も、人生は嫌なサプライズだけではなく、どこでどのような思いがけない好都合が待ち受けているか、決して分かりません。常に新しい道を切り開いているマドモアゼル・シネマに見習って私も昨日よりも明日に全力を注いでいきます。



Voice of Onogi Toyoaki

古典芸能の制作者である小野木豊昭氏が、2023年もマドモアゼル・シネマに声をかけて下さり、神楽坂の毘沙門天の境内に招くとともに、秋にはセッションハウスで女義太夫奏者と共演する公演を実現して下さいました。この企画に込めた想いを語って下さいました。

再現から再生へ@神楽坂

伝統芸能プロデューサー/古典空間 小野木豊昭

2023年11月11日(土)12日(日)、【女義太夫×マドモアゼル・シネマ 街と架けあう神楽坂橋/時層を超えて一響き渡る声・響き合う/『生写朝顔話』明石船別れの段~大井川の段より】が二日間、3公演上演された。

マドモアゼル・シネマの皆さん、朗読・ダンスの松本大樹さん、女流義太夫の太夫・竹本京之助、三味線・鶴澤賀寿のご両人…それぞれが「真剣勝負」で対峙する、只々刺激的で高揚する時間だった。昨年、伊藤直子さんより、両者共演のご相談をいただいた。(一社)新宿NPOネットワーク協議会が運営する「まちなか交流イベントスペース 神楽坂 commons 1st」にて稽古中だった竹本京之助さんの浄瑠璃を、たまたま通りかかり洩れ聞かれた伊藤さんの発案をうかがい、その実現性を想えば想うほど正直途方に暮れた。マドモアゼル・シネマの皆さんとは、毎年5月に二日間、神楽坂のまち全体を舞台上に繰り広げられる『神楽坂まち舞台・大江戸めぐり』で三年間お付き合いいただいている。2021年は津軽三味線×尺八×ジャズピアノ×ドラムス、2022年は十七絃(箏)、そして本年5月は邦楽囃子(小鼓・大鼓・太鼓・笛ほか)と、すべて器楽演奏とのコラボレーションに臨んでいただいたが、今回はテキスト…言葉と共にある三味線音楽である浄瑠璃(義太夫節)。しかもそのテキストは江戸時代の大阪弁である。崩すことが許されない様式や型の存在が前提で、「コテコテ」の伝統芸能である義太夫節に、自由で抽象的な身体表現を旨とするコンテンポラリーダンスが果たして噛み合うものか、悩みに悩んだことを告白する。そこで、神楽坂を通してご縁のある日本演劇研究者で明治大学情報コミュニケーション学部准教授・日置貴之さんに相談し、監修と朗読部分の台本作成で参加いただくことになった。検討の結果、浄瑠璃は『生写朝顔話』が選ばれ、抜粋して朗読部分と合せて約1時間、三部構成の作品となった。人形浄瑠璃では天保三年(1832)に初演。秋月弓之助の娘深雪は、宇治の蛸狩で宮城阿曾次郎と恋しあう。その後縁談の話が起こり、その相手が阿曾次郎と知らずに深雪は家出。両眼を泣きつぶして盲目の女芸人・朝顔となり阿曾次郎との悲恋のすれ違いを重ねて流浪するが、紆余曲折の末に結ばれる物語。作り込まれるプロセスで深く刻まれたことは、伊藤直子さん、そしてマドモアゼル・シネマの皆さんが、人形浄瑠璃としての作品を映像で何度もご覧になり、作品のテキスト一言一句を丁寧に読み込み、物語の展開はそのままに、独自の解釈と共に身体表現として変換されていたことだ。本来は、作品に対して人形や歌舞伎俳優が繰り返し上



演を重ねることで出来上がった様式や型がある訳だが、今回は、『生写朝顔話』という作品にコンテンポラリーダンスの方法、マドモアゼル・シネマの方法で、イチから取り組み、新たな表現を創り上げられたのだ。どんな作品、どんな名作にも必ず「初演」がある。何かが人々の琴線に触れ、その後上演を繰り返しつつ洗練され、やがて「古典」として受け継がれて今に至ることになる。もしかしたら、そのプロセスで生まれたエッセンスに魅力を感じるからこそ、こうしてこのジャンルに長きに渡りお付き合いしているのかも知れない。人形浄瑠璃や歌舞伎の舞台上で観慣れていた『生写朝顔話』だが、マドモアゼル・シネマの身体表現との対峙によって、浄瑠璃(義太夫節)の一語一語が今までに感じたことのないような、実にイキイキと、力を持った言葉として甦ったような印象を覚えた。まさに私たちが古典作品と向き合う時に目指す「再現」ではなく「再生」を目の当たりにした思いだった。自らの体質とは異質の…しかも大きく異なる表現に歯車を合わせる作業。今回これに費やされたエネルギーは並大抵のものではなかったことと思う。義太夫節という伝統芸能が、様式化された表現を受け継ぎ、生まれた時代とは価値観の異なる現代に「生きている芸能」として存在し続けるために、今回は不可欠の経験だったのかも知れない。そして、今年も予定されている「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり2024」では、マドモアゼル・シネマの皆さんと気鋭の尺八奏者4名とのコラボレーションが予定されている。言葉こそ存在しないが、演奏家の身体をそのまま延長した竹の管楽器が発する音は最も言葉に近い。対峙し、呼応し合う音と身体が創り出す世界に大きな期待を寄せている。

Voice of Kasai Mitsutake

1998年以来舞台上に立ち続けている笠井瑞文が、試行錯誤しながらダンスの在り様を模索することへの想いを語ります。

踊り続けての25年を振り返って

一般社団法人セッションハウス企画室理事 笠井瑞文

初めてセッションハウスで踊らせてもらったのが1998年の二月でした。当時自分のソロ公演を行う小劇場を探していました。当時はインターネットも無かった時代でしたので、人の噂や、劇場に詳しい人の話を参考に、色々調べ、直接見に行ったりしました。そして見に行った中から、一番自分がピンときたのがセッションハウスでした。そして下見に行ったその日に、ここを借りると決め、セッションハウスで初めての自分の公演を行いました。思い返せば、当時は今と比べて小劇場というものがあちこちにあった時代でした。それぞれが皆違う劇場の匂いを持ち、それぞれの特色みいたいものがありました。芝居が多い小屋、ダンスが多い小屋。もちろん両方やってくる小屋もありました。劇場が独自の色の企画を立ち上げ、ダンス公演が行われていたり、フェスティバル形式の公演が行われてたりしてました。その中でセッションハウスは、本当に数えきれないほどの多くの企画を産み、途切れることなく現在も続けています。僕も本当に多くの企画に関わらせていただきました。その中で多くのダンサーとも知り合うことができました。小劇場は踊る場所でもあり、交流の場でもあり、そして新しいものが一番最初に生まれる場所でもあります。しかし残念なことにここ数年、新型コロナウイルスの影響もあり、多くの小劇場が閉館してしまいました。そんなこともあり、こ

こ数年、自分でも何かできることはないかと思い、企画を考え、スタッフも自分で行い、天使館という稽古場で、不定期ですが年に何回か公演を行なう活動を続けてきました。稽古場主の笠井叡のソロ公演や、私が以前セッションハウスで行っていたナイトセッション、ダンサーとダンサーの即興公演など、天使館で行って来ました。今はだいぶ緩和されましたが、ここ数年前まではコロナの影響で、場所に人が集まるということが難しい時が数年続きました。ダンス公演もオンラインなどに変わり、劇場から人が離れ、人と人との交流もシャットアウトされ、観に行くお客さんの力も弱くなってしまいました。そしてダンスの在り方そのものが変わってしまいました。時代とともに変化していくことは当たり前のことですが、これから未来に向けて、また小劇場から、この時代にあった新しいムーブメントが生まれてくることを信じています。壊れたものからまた新たなもの作りだす。作るより壊す方が簡単です。作る方が数倍時間がかかります。でもそこにはまた生み出す喜びがあります。そんな喜びを噛み締めて、これからも、セッションハウスはじめ小劇場が盛り上がっていったらいいなと思っています。



かつコンドルズ、チーム鴨川メンバー)と筆者(帝京科学大学専任講師かつトップスター、チーム鴨川メンバー)の実践的舞踊研究者の両名が監修者となり、①U25、U35で応募されたダンサーを選定、②作品上演(U25は10/14、U35は11/18)、③「Zoom感想会」(U25は10/18、U35は11/22)、④ダンス花出演者5名を選出、⑤ダンス花出演者へのフィードバックと新作に向けたアドバイス、⑥ダンス花公演(2024年2月17日)、⑦「Zoom感想会」(2024年2月21日)という流れであった。②の作品上演後の観客アンケートでは「書きたいと思うダンサーへの感想」として観客の主体性を促す形で記述してもらい、③の「Zoom感想会」の資料とした。③の「Zoom感想会」は各ダンサーに作品のコンセプトや着眼点を述べてもらい、監修者2人の作品分析、アンケートをカテゴリーで分類したものを各ダンサーに提示という流れで行った。アンケート分析として例えば、「作品から野心を感じた」、「見えないからこそ見えるもの、こういうあり方もあると感じた」等の意見は【印象(表象)】とカテゴライズし、その他にも【動き】【構成】【演出】【アドバイス】と具体的意見からカテゴライズしダンサーに提示した(櫻井拓斗のアンケート分析より)。⑤のフィードバックは③の「Zoom感想会」でダンサー自身の作品コンセプトの言及をテキストマイニングしたもの(テキストマイニング分析はダンサー本人が語った言葉を頻出単語ごとに分け、頻出順に単語が大きく



「U25」 櫻井拓斗



「U35」 小林菜々

図示され、自分が何を重視して作品を創作していたのかが視覚的にわかる効果がある。例えば大西彩瑛さんの場合、「作品」「作り物」「観客」「放置させない」「実」「虚」などが頻出しており、『これもジョーク』と



「U35」 河皮成&雷はつ葉



「U35」 大西彩瑛&村上玲美

「ダンスブリッジ」や「ダンス花」「シアター 21フェス」などで公演後に「メール感想会」を開くなど、振付家と観客の作品の捉え方を研究分析しているコーディネーター望月崇博からの報告です。

Voice of Mochizuki Takahiro

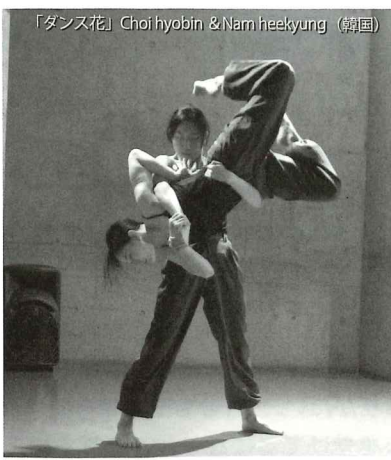
「ダンスブリッジ」や「ダンス花」「シアター 21フェス」などで公演後に「メール感想会」を開くなど、振付家と観客の作品の捉え方を研究分析しているコーディネーター望月崇博からの報告です。

Zoom 感想会報告

望月崇博

昨年度の「ダンス花」などでの新たな試みとして「上演」だけでなく「事後トーク」(各公演後の水曜夜に観客、出演者参加のZoomを活用した感想会:以下Zoom感想会)を設けた。「Zoom感想会」は「観客主体の参加」を重視し、作品から享受したものを誰かと共有することで発展的な作品鑑賞になるのではというところから始めた。コーディネーターの進行の元、振付家の作品創作の内側や着眼点、作品解説に加え、各ダンサーによる他の振付家の作品の捉え方、観客の疑問点の解消など多岐に渡り、作品を掘り下げる作業が出来、ダンサー側にも観客側にも収穫をもたらしたことが前年度の成果として挙げられる。今年度はその成果と可能性を若手ダンサーの活動支援に活用した。コロナ以降、劇場に足を運び観劇する行為は減少し、若手ダンサーは活動(生活)していくことが困難となり芸術活動をやめてしまう一因となっているが、物理的な対応策として多くの若手助成支援(金銭的助成支援)がなされている。他方で上演芸術は観客と演者のコミュニケーションによってなされ、観客の存在が上演作品の精度を上げる(ダンサーの成長を促す)要因となり、活動継続には観客の存在が不可欠であることも一理ある。以上のような理由から観客とダンサーの質的な交流を図った支援は舞踊活動継続を促進するものと言える。今年度においてはU25、U35のダンサーを募って支援プロジェクトとして行った(本稿執筆段階では継続中)。若手ダンサー支援プロジェクトの概要として石淵聡先生(大東文化大学教授

いう作品の根幹が明確に語られていたことが理解できた。)と、監修者による新作に向けたアドバイス(例えば大西彩瑛さんの場合、コンテンポラリーダンスにおける音響の効果についてのアドバイス)を資料にまとめ提示し、新作創作の素材とした。これらのような



「ダンス花」 Choi hyobin & Nam heekyung (韓国)

作品上演、作品分析、共有といった継続的な関わりは、ダンサーの客観的視点での立ち返りを促すことを可能にしたのではないと言える。実際ダンサーからは客観的な意見から自身の状態を冷静に見る機会になったことや、今回に限らず今後の創作の参考となったことなど一定の評価を得られた。ダンス花公演前での執筆のためどのように具現化されているかは未知数であり、もちろんここでは言及できないが、いずれにせよ2月のダンス花公演が楽しみである。さて、ここ数年セッションハウスや他の劇場で若い(一概に年齢で定義はできないが...)ダンサーたちの作品を鑑賞する機会があり、モヤモヤと抱いていた問題点が今回の若手ダンサー支援プロジェクトを行ってみて、はっきりと輪郭を帯びてきた。いくつか列挙してみよう。①いわゆるダンスのテクニックはあるが、②作品コンセプトは明確であるが、③コンセプトを伝える作品構成力もあるが、、「伝える」ということに欠けている。身体が開かれていないと感じてしまう。ダンスはアートであるが、観客が存在した時点でエンターテインメントでもある。そういった意味で自己完結しがちなダンスをとにかく開くこと!なぜならダンスだから。開かれたダンスはどんなものでも尊いと感じる。「伝える」ということを重視すれば必然と観客動員につながるのではないかと考えられる。上記した3点に加え、ダンスの原点である踊る喜び、生きる喜びが身体を通して伝わったらそれはそれは素敵なことであるし、そんなダンスを見てみたい。現代のダンスだからこそ踊る身体の原点を忘れず、見つめ直し、アップデートさせていくことが



「ダンス花」 鈴木亮祐&茂木孝介

「ダンス花」 山村佑理

「ダンス花」 山村佑理

望まれよう。このような基準からダンス花に出演する5名を選定した。再度、2月のダンス花公演が楽しみである。

【付記】セッションハウス、アワード2023受賞者決まる
「未来賞」:G-ray(鈴木亮祐、茂木孝介)、N.motion Dance Project(Choi hyo-bin, Nam hee-kyung)
韓国国際フェスティバル「New Dance Asia」招聘
:APINUN(山村佑理、あずみびあの)
審査員:尾本安代、笠井瑞文、松本大樹

Voice of Sugawa Moe

ダンサーと観客の生体反応を試みる実験的な4公演を行った須川萌が、その試みについて報告します。

Boiling Mind が目指したことは

慶應大学大学院メディアデザイン研究科 須川 萌

BoilingMind プロジェクトは、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科とマドモアゼルシネマを掛け持つ、須川萌(私)の研究から始まりました。BoilingMindは、観客/ダンサーの身体反応を舞台上や観客席に可視化し、観客とダンサー、作品とが共創する舞台芸術です。普段は、見る観客/見られるダンサーという関係に、テクノロジーを用いてその境界線を緩め、ダンサーと観客を繋ぎます。そして、まるで観客も舞台美術の一部のように舞台を作り上げる。そのような新しい鑑賞体験を生み出すことを目的としています。2019年から2020年にかけて、観客に装着した心拍センサー、発汗センサー、アイトラッキングから解析したリアルタイムの感情データを、舞台上に映像と音楽、照明として構成し、舞台美術とするシステムの試作と研究を行い、セッションハウスで公演を行いました。このプロジェクトを通じて舞台上の関係性に新しい可能性があると確信した一方で、アートとテクノロジーの融合による舞台表現はもっと深化できる。と悔いを残したまま卒業しました。アーツカウンシルの助成により、計4公演、異なるダンサー達とKMD研究者との共創が再開し、Boiling Mind3.0が始まりました。

第一弾はマドモアゼルシネマ。心拍センサーを装着した観客の感情データが、ダンサーによって直接触れられる舞台上の人影に投影される等、「ダンサーが観客の感情と踊る」方法を考えました。これらはダンサーにとって、観客の心を近くに感じ、観客と共に踊る感覚を呼び起こしました。第二弾のブッシュマンでは、ダンサーの身体感覚を、観客が装着した振動するデバイスを通じて、触覚として伝える試みを行いました。KMDのReiさんが、振付家黒須さんの身体感覚を、一挙手一投足まで密に触感に翻訳する作業を行い、それをリアルタイムに観客に伝送する「触覚DJ」という新たな舞台スタッフとして活躍。観客にとっては普段意識できない身体



マドモアゼル・シネマ

感覚を迫体験し、より深くダンスを見るきっかけになったと同時に、ダンサーにとっては「身体上の動き、ダイナミクスが触覚として観客に伝わる。普段伝わらないものを伝えら



ブッシュマン

れる」という新しい発見がありました。第三弾の笠井瑞丈と3つのデュオでは、ダンスも音楽も舞台美術も全て即興！観客やダンサーの心拍の鼓動が赤く点滅する柔らかいボールを遊び道具に、時にコメディになったり、時に命の永久性を



笠井瑞丈

を感じたり、時に孤独に寄り添い合う動物たちの魂に見えたり、たくさんのアイデアが毎公演生まれました。不確実でごちゃごちゃな即興が終盤で繋がっていく様は、プロジェクトが目的とした「観客とダンサーの境界を溶かす」風景の答えが見えた瞬間でもありました。第四弾は、マドモアゼルシネマ、ブッシュマン、笠井瑞丈による合同公演「祝祭の始まり」。心臓の鼓動を可視化する「e-lamp.」を観客全員とダンサーが装着し、感情を舞台空間全体で共有しました。「e-lamp.」の光の明滅をリアルタイムに撮影し、ダンスシーンのテーマに沿った美しい映像として投影。観客の心が空間へ反映され、ダンサーと一緒に観客が舞台の一部になる。このプロジェクトの集大成となりました。テクノロジーによって、他者とコミュニケーションが生まれれば、時に分断も起きます。テクノロジーの人智を超えた技術に感動し、時に絶望します。ダンス鑑賞というアートにテクノロジーが入ることで、分断や絶望が起こるかもしれません。それでも、テクノロジーがダンサーや観客にとって、安らぎや希望を感じる、未来のコミュニケーションツールになってほしいと願っています。私がここにいる、あなたがここにいる、出会い、心のままに幸せを感じる。また世界のどこかでBoilingMindのDNAが繋がることを願って....。



Voice of Taiju Matsumoto

セッションハウスで長年ダンスクラスを受け持ち、時には作品を振り付け踊ってきた松本大樹が、これからもダンスを学び踊っていく方たちへお届けする熱いメッセージです。

クラスを教えながら教わること

一般社団法人セッションハウス企画室理事 松本大樹

それぞれ違うペースで取組めばいい、こだわりは変わってもよい。大切なことは向かおうとすること。周りに同じように集中する体があるなかで取組める環境であればなおありがたい。自分もそうやってクラスを受けていた。クラスを受けて為になった、理解できたと思えるものをつくり教えていれているがそれでも、後から更に気づかされることもあり振り作りは奥が深い。振りを作り続けていると、機能と美しさを兼ねた魅力あるつながりを組み立てられそう、におうぞ、と"動いてわかる気持ちよさ"をつくれるときもある。使う部位を腕から首周りへ流れを変えてみたり、足を運ぶ前にねじってから進めて方向を変えてみたり。生徒のころ、先生の作り出す動きの組み合わせの美しさを見て惚れリリース・テクニックに没頭し、組合せの順序を踊ってみて感激のあまり授業中動けなくなり、傍らから動く生徒らを眺めて、配置された振りの斬新さを感動を伴って挿んだ舞踊体験が、動きを作っていく美的感覚として刻まれている。生活もしながらどうやって毎週々々あのような新しい組み合わせを作り続けてくれたのだろうか？知らないで渡った土地で、自分はそのセンスにめぐり会え、繰り返し浴びることを許されて何て幸運なことだったろう。踊ったことなんてない、という人にこそクラスに出て、動いた事のないシークエンス / 連鎖を体で通ることで身体の話しかけてくる言葉、感覚に耳を傾ける時間をつくってほしい。それぞれ違うペースで、違うことにこだわってよい。それがまた変わっても。クラスという場は周りに同じように集中する体がある中で自分に向かうことが出来る。教えていると、クラスを受ける人の成長や気づきにたちあわせてもらえる。その人のことを大切に思っている親御さんや家族ならこういう成長している姿を見たいだろうなあ。クラスは、観ても尊く貴重で刺激的な体験がいつも起きている。ダンス学校を卒業して教え始めて2年ほどした頃、クラスを受けもつことにつまずき、もう一度あの先生のクラスを見学したくてラバン・センターを訪ねた。先生をつくるムーブメントは僕を救うと感謝を伝えることが出来てそれはよかったが、つまづいた気持ちが晴れることはなく、整理のつかないなかなか難しそうな宿題として持ち帰ることになった。僕のクラスにも何年も前によく出ていた人がふらっとクラスに現れ体に集中して帰っていくのを見る時それを思い出す。踊って動くことを通じて考え、知り、言葉にできない疑問点に到達させてくれる。頭では整理などを



はつかない現実を、踊って音に体をゆだねることで眠りがするような整理をしているのかもしれない。踊ることも、踊りを観ることにそういう力がある。もう一度訪ねたラバン・センターから持ち帰った宿題が難しく思えたのは、その力が深く馴染んでもないまま先生として、ガイド役としてクラスを運んでいた居心地のわるさを、恥ずかしく感じたまれなかったからだろう。今は、集まってくる人それぞれのペース、集中があつてよくて、そんなふうに恥ずかしく感じることは要らないものなのだと思うようになった。踊りを観ることに力がいえばセッションハウスには「シアター 21 フェス」という公演がある。1997年からスタートして金曜の21:00からダンスを観ようとその名がついたと聞くロングヒットなプロジェクト。今ではチャレンジあり、折角作ったんだからの再演作品あり、試み取り組みジャンルレスでバラエティ。週末にしっかり観る時間をとり公演している。21を観るとき、その多様な工夫やそれぞれの意識が受け取れる。鑑賞は体験のほどを映す鏡で、観た感想もまたそれぞれのところがかえって安心する。どこをどう工夫したかや何を意識して創ったのかはアフタートークを催してもらるか友人でもないかぎり本来知ることなどないわけだが、自分がもしダンスクラスに出たことがあって、自分を見つめ、自分で考え、探せた経験があればその経験をもって、初めて観るこの舞踊作品をつかった振付家の発想や苦勞を自分なりに想像し、試みの意図や振付家の意識に観ながらたどり着く手助けをしてくれるかもしれない。苦しんだ、試みたクラスでの経験があったからこそダンサーとして創る意識を想像できる力が備わるかもしれない。探そう、向かおうとする熱は思わぬ視点から、思わぬ瞬間、まだ誰も見たことのない未来を形にしていくかもしれない。それもまた、踊り、観ることのでたどりつき受けとる力のあらわれ。斯く言う私にも、セッションハウスは未来からのメッセージのように踊りに、日々を生きるために必要な企画や提案を柔らかに用意してくれてきた。私はその時はひたすらその用意された栄養を食べるだけで、のちのち気づけたり、気づけなかったり、効いてきたりしながら日々、得た養分で踊れてもいるわけで、ものによっては何年も何年もかけて自分を正しながら。ダンスを観ながら、クラスを教えながら、教えてもらい、ひらめき、また伝えながらの毎日である。



ダンス・プログラムを支えたセッションハウス・スタッフ

照明：石関美穂、鈴木淳 / 音響：上田道崇、蓮子奈津美
舞台監督：鍋島峻介、蓮子奈津美 / 映像：上田道崇、中島詩織、原綾香、秋元麻友子、川崎陽恵、染宮久樹
写真：伊藤孝、山之上雅信 / 会場スタッフ：竹之下たまみ、高橋志帆、古茂田梨乃、井口智恵、新堀佳奈、原綾香
制作：伊藤孝、伊藤直子、鍋島敬子、石関美穂、鍋島峻介、鈴木加奈子

ダンス・プログラムを支えた団体

日本芸術文化振興基金、アーツカウンシル東京、株式会社セッションハウス、ハニカム基金

2023年 ダンスプログラムの軌跡

1月	14日	シアター21フェス vol.128① (1回公演)
	15日	シアター21フェス vol.128② (1回公演)
	21日	シアター21フェス Step Up vol.178 (2回公演)
2月	4日	「ダンス花」(2回公演) セッションハウス若手ダンサー支援プロジェクト 坂井美乃里、G-ray、伊那那美、APININ、岡田結実、佐藤美優、大西優亜美に加えて 久しぶりに韓国NDAダンスフェスの審査員ユ、ホシクが率いる韓国のダンサー N.motion Dance Projectの2名のダンサーが参加
	11・12日	近藤良平リング企画 「日本文化の新発見・あのときかもしれない」(3回公演) 出演：近藤良平、古賀今日子、谷口界、水上初佳、安田有香、松本じろ
3月	5日	UDC 22th「つつつ」(2回公演) 全国8大学34名が参加出演
	19日	ダンス専科成果公演(2回公演) 松本大樹、坂東真希、尾本安代、近藤良平、伊藤直子の振付作品に42名が出演
	26日	「アカイクツ5」(2回公演) ダンスの虜の女性たち4人にあけみママ、 小川麻子、小福、奥田純子、向田聖名子が振付作品に5人が出演
4月	1・2日	Boiling Mind vol.3 「ココロイタダキマス」(3回公演) 慶應大学大学院メディア・デザイン科 (Keio Media Design) とのダンサーと観客の生体反応を舞台芸術にする 実験的プロジェクトの1回目 出演：マドモアゼル・シネマ (竹之下たまみ、蓮子奈津美、中島詩織、 秋元麻友子、佐藤那、齊藤奈影、勝木路子、須川萌)
	29・30日	Boiling Mind vol.3「シェール2ROOM」(3回公演) 出演：ブッシュマン (江口カ斗、渋谷智志、手塚バウシュ、中村駿、黒須海海) Keio Media Design
5月	13日	D-zoneフェスティバル「Who am I?」(2回公演)
	27・28日	Boiling Mind vol.3 「不確実性の動きが生む偶然の世界」(3回公演) 振付：笠井瑞丈 出演：井田聖彰美、白神もこ、Aokid、笠井瑞丈 Keio Media Design
6月	10日	D-zoneフェスティバル 「タイタス・アンドロニコス」(2回公演)
	11日	シアター21フェス vol.129① (1回公演)
	18日	シアター21フェス vol.129② (1回公演)
	24・25日	Boiling Mind vol.3 「祝祭のはじまり」(3回公演) 出演：ブッシュマン、マドモアゼル・シネマ+笠井瑞丈、Keio Media Design
7月	1日	D-zoneフェスティバル「福祿・precious time」(2回公演)
	8日	D-zoneフェスティバル「White Labyrinth」(2回公演)
	16・17日	D-zoneフェスティバル「gifted part2」(3回公演)
8月	25日	笠井瑞丈×皆川まゆむ night session「共犯関係」(1回公演)
9月	9日	シアター21フェス vol.130① (1回公演)
	10日	シアター21フェス vol.130② (1回公演)
	17日	ダンスブリッジ 「明日に架ける橋・とりかえばや橋」(3回公演) 「七つの大罪」振付：笠井瑞丈 出演：マドモアゼル・シネマ 「いい子わるい子守唄」振付：伊藤直子 出演：江口カ斗、手塚バウシュ、 田村梧、香取直登、望月崇博
10月	14日	若手ダンサー支援プロジェクト 「アンダー25シアター21フェス」(2回公演)
	21日	「アカイクツ6」(2回公演) 池田家、野沢美和子、ノリエハマナカ、Haru
	28日	「アカイクツ7」(2回公演) 坂垣朝子、米川千津子、黒沼千春、依田久美子
11月	11・12日	ダンスブリッジ 「明日に架ける橋・神楽坂橋」(3回公演) 「時層を超えて〜響き渡る声・響き合う体」 振付演出：伊藤直子 監修構成：日置貴之 出演：マドモアゼル・シネマ、松本大樹 浄瑠璃(太夫)：竹本京之助 三味線：鶴澤舞音 制作協力：古典空間
	18日	若手ダンサー支援プロジェクト 「アンダー35シアター21フェス」(2回公演)
12月	23・24日	ダンスブリッジ 「明日に架ける橋・追想橋」(3回公演) 振付・演出：近藤良平、伊藤直子 出演：近藤良平&八坂采音、マドモアゼル・シネマ

ガーデン活動報告

セッションハウスの2F【ガーデン】では、2023年も自主及び共同・協力企画のほか、レンタルの展覧会、トークの会、朗読会、演劇公演、クロッキー会の活動の場となった。

自主及び共同・協力企画の軌跡

- 1月11日～15日 さかもと直子・柴崎崇山二人展
- 3月 8日～12日 第7回わわ俳句展(T)
- 3月22日～
4月10日 ツーゼ・マイヤー展「Spring Diary」
- 4月25日～
5月1日 百花Ⅱ 2023(T)
- 6月27日～
7月2日 三希展(T)
- 7月 6日～11日 巴里祭に寄せたアート展(T)
- 7月14日～17日 下条幸子展
- 9月13日～18日 F展vol.7
- 9月28日～
10月7日 高須賀優展「現れる人物 旅のクラウン」(T)
- 10月17日～23日 大和聖美×X-Ray二人展「万華鏡」
- 11月 3日～ 5日 23歩展「せん」
- 11月11日～16日 beyond borders～
バックボーンもジャンルも異なる作家たち(T)
- 11月19日～26日 ART SESSION(有川道子、小川泉、津田恵子)
- 12月 6日～10日 絵画教室アトリエロゾー展
- 12月16日、17日 from an art展(松原響)

※(T)は演劇美術社の豊田紀雄氏の制作企画

※吉田卓史主催のクロッキー会は36回開催

※渡辺一枝トークの会「福島の声を聞こう」は1回開催

ガーデンではここ数年コロナ禍の影響で、展覧会などは数多く出来なかったものの、毎年恒例の企画も定着して、中味の充実化を感じられるものが多数ありました。それらの企画を縫って多数実施されたのがクロッキー会でした。それを主宰する吉田卓史のクロッキー会によせる声をお聞き下さい。

セッションハウスクロッキー会を通じて学んだこと。 吉田卓史

その日は、いつも通りとても良い天気、6階の窓からマドリッドのメインストリートの地面が見えないくらい多くのストライキ中の人達を眺めている90歳くらいのおじさんとその奥さんから、なんとというか、なにかしらの高貴さみたいなものが感じられたことを時々思い出します。僕がその6階の人体デッサン研究所に通っていた当時、スペインは不況で、しょっちゅう大きなデモをやって、半分はお祭り騒ぎなのだけれど。モデルもストライキ中の研究所、いつもは100人以上いるのに、その老齢のおじさん達も含めて、たった6人ばかり。僕もその中にいて、仕方がないから、自分達をモデルに絵を描くことに。その時、外で大騒ぎしてしている人達より、ここで、そんなふうには絵を描く人の方が、より自然で、しっかりとした価値観を持って、大切なことが何なのか？分かっているように感じたことを覚えています。僕は、今ではクロッキー会以外、芸術と関係ない普通の仕事をしながら、

何年住んでも慣れない東京に居て、たまにこんな所に居るのはウンザリだ、なんて思った時など、あのおじさん達のことを思いだし、何が大切かを考えるようにしています。僕がセッションハウスクロッキー会を引き継いで、もうだいぶ経ちますが、当初からのコンセプトである描き手とモデルとのセッションの場という空間がとても自然に出来上がっていると感じます。それは、相互の純粋で単純な動機から生まれるような感じで、その時、この場に来てくれた人達にあのおじさんから感じたような、なにかしらの高貴なものを感じることがよくあります。そうして、僕にとって、そのような人達がつくってくれたこの空間を体験していること、それ自体がとても大切なものとなっていることに気づき、嬉しくなり、前向きになり、またそれが生きるための重要な思想と、リアリティーのヒントを与えてくれるように思えるのです。あの時、感じたように時代や世の中がどうであれ、しっかりと自分の価値観を持ち、それに対して真摯な態度でいることの方が大切で、それはまた、かなり難しいことではありますが、僕もクロッキー会を通して感じる純粋で単純な動機がなんなのか？を考えれば、自分のすべきことが分かるように思えます。先日、あの当時からお世話になっているマドリッドのおばさんから、メールが届いて、何かをやり続けるためには、楽しむこともとても大切です、というアドバイスをもらい、そして添付してくれたおばさんの絵は、確かにその楽しさが感じられるものでした。そう言えば、前にモデルになってくれたダンサーさんが、「お客さんも温かく、とても楽しかった」という感想をなんとも清々しい表情で話してくれたことがありました。そう言ってくれた人達やこのクロッキー会に通ってくれる人達は、その楽しむことの大切さを分かって、それもまた、このクロッキー会の空間を作っている要素である、と思います。絵を続けてきて、僕が学んだことは、いろいろあるとは思いますが、最初に頭に浮かぶのは、それを通じて、出会えた人々の大切さです。それが自分の考えを作ってくれて、助けてくれて、ゆえに、生きていけると、心から思います。僕にとって、セッションハウスクロッキー会もそのチャンスを与えてくれる大切な場となっている、と感じます。

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」と鴨長明の「方丈記」の有名な書き出しである。今の世界は戦争もあり自然災害も数多くあって、未解決のまま動いていくままで元の流れには戻らずにいて「新しいまだならず」の状態です。こうした世の中でアーティストの想いもいろいろ揺れ動いていることが、皆さんのお気持ちに届き、共有することが出来たらと願っています。(T.I)

編集：一般財団法人セッションハウス企画室(伊藤 孝、上田道崇、井口智恵)
発行：〒162-0805 東京都新宿区矢来町158番地
TEL. 03-3266-0461 FAX. 03-3266-0772 E-mail: mail@session-house.net
URL: www.session-house.net

